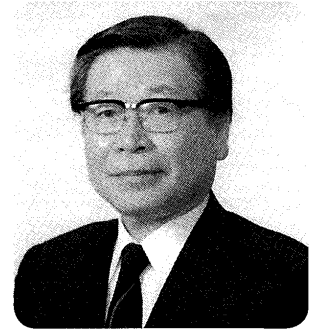


## 巻 頭 言

## 魂を入れて仏を作る教育

明倫短期大学 学長

下河辺 宏 功



今日の日本においては、マハトマ・ガンジーのいわゆる「七つの社会的大罪」、すなわち、1. 哲学なき政治、2. 道徳なき商業、3. 労働なき富、4. 人格なき教育、5. 人間性なき科学、6. 良心なき快楽、7. 献身なき信仰からいかにして脱出するかが大きな課題となっている。

周知のように、政治家の汚職やスキャンダル、天下りのもたらした談合をはじめとし、企業の脱税・粉飾決算、大学教授のセクハラ、教育委員会の偽善、小・中学生のいじめを苦にした自殺、乳幼児の虐待、果ては残忍な殺人事件等々暗いニュースが後を絶たない。これらの背景には“バレなければ、何をしてもいい”という道徳観、倫理観の欠如がある。このような社会をもたらした要因は、戦後三代にわたって行ってきた“人格なき教育”に帰すると言ってもよいであろう。これは、“仏作って魂入れず”の教育である。安倍新内閣は「教育の再生」を国策に掲げ、公教育、家庭教育、地域教育を挙げている。大いに期待したいところであるが、元に復すには三世代を要するであろう。われわれ教育に携わるものの責任は重い。

本学は今年で十周年を迎え、自他共にゆるす繁栄へ導いたことは誠に喜ばしい。国際学会賞の受賞2件、特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）への採択、厚生労働大臣賞受賞など輝かしい業績をあげた。これは本学の建設のため、初代学長内田安信先生以下教職員全員が一丸となったたゆまぬ情熱と努力の成果である。教職員一同に敬意と感謝の念を表したい。

しかし、この十年を省みると、決して順調に歩んできたわけではなく、2人の学生の尊い命を失うなど不幸な事件があったことも事実である。そのたびに原因を究明し改善を図ってきたとはいえ、毎年、1割前後の留年や休・退学者が出ていることは、当人たちにとっても不幸なことであり、早急に対応策を講じていかなければならない。

何より反省すべきは、自らの教育姿勢に問題はなかったかという点であろう。所謂、教員錯覚、すなわち、自分の講義は最高であるという錯覚に陥っていなかったか、また、常に学生の声に耳を傾け、学生による教育の点検評価を忠実に受け入れ改善に努めたか、ということである。日常の匆忙にまぎれ自省しないのは責任回避であり、真摯に三省し、何よりも教育を最優先すべきである。

では、よい教育とはなにか。ここにスウェーデンの社会科の教科書に収録されていると言うアメリカの家庭教育家、ドロシー・ロー・ノルトさんの詩を引用し参考に供したい。

批判ばかりされた子どもは、非難することを覚える。

殴られて大きくなった子どもは、力に頼ることを覚える。

笑いものにされた子どもは、ものを言わずにいることを覚える。

皮肉ばかり言われる子どもは、鈍い良心の持ち主となる。

激励を受けた子どもは、自信を覚える。

友情を知る子どもは、親切を覚える。

かわいがられて、抱きしめられた子どもは世の中の愛情を感じることを覚える。

（丹羽宇一郎：二十一世紀 期待される人間像、学社会会報、No. 858, p 8～25, 2006 より抜粋）

教育は心である。真剣勝負である。片手間でよい教育ができようはずがない。本学の創設者、木暮山人先生の残した儒学の三綱五常の精神は心の大切さを教えている。五常（仁、義、礼、智、信）の一つ「信」なくして学生はついてこない。よい教員、よい学習環境には自ずと学生があつまる。そして学生が学生をよぶのである。厳しい時世にあつて理事者側も人間性なき経営に陥らないように心しているところである。魂入れて仏を作る教育こそ本学の伝統としたい。

全入時代を迎えた今日、これからの十年、現状を維持しさらに発展させていくことは容易でない。さらに気を引き締めてかからねばならない。